

2008年2月25日の出来事でした。

外は北風、木枯らしがビューン、ビューンという感じで吹き荒れています。昼間は曇だったものが夕方会社から帰るころには、雪になりました。こんな状況が一番危険なフリーズドレインの条件です。暗くなると怖いということでそこその時間に会社をでました。会社からアパートまでは、三十マイルくらいありますが、それでもどうにかパイオニアという道にはいり、なんとか無事に家に辿りつくかなというところまでできました。ところが、此处が曲者。この道路の最後はちょっとした長い坂道になっており、此处が凍っていたら怖いなということで、いつもは追い越し車線を走っているのですが、最後のわき道に入ることを考えて、ちょっと手前で走行車線にはいろうと考えていた矢先です。ご存知のようにこちらは車が右側通行ですから、右側の車線にはいった、というより入ろうとしたのです。

一度目のニアミス

その右側に入ろうとした手前に自動車が一台、これも方向を変えようとして徐行運転をしていたのです。これに気づいてこちらは柔らブレーキを踏んだのですが、なんと、なんと、ブレーキが利かないんです。坂道で下り坂だったということもあり、すーっ、すーっ、と何時までも滑っていくのです。これはぶつかる。なんとかしなければと、もとの追い越し車線に戻ろうと必死でハンドルを切った。なんと、運のよいことか、もうあと、30センチくらいのところで、車が左に向きを変えてくれた。寸でのところで追突が免れた。フーッとここでため息。

二度目のニアミス

ところが、追い越し車線に入った車は、そのまま、まだ、スーッと滑っていて、ハンドルが利かない。これはまずいとおもった。目の前に反対車線の車が走っている。これに突っ込む。もう駄目だと覚悟をしながらも、必死に今度はハンドルを逆に切り、元の車線に戻ろうとした。車は向きをすこし変え、通常のムキになったが、そのまま反対車線のほうに滑っている。なんとかしてくれという感じで、ハンドルを回す。それでもまだ車はいうことを聞かず、あゝ、これでぶつかると思った瞬間、かすり傷一つなく、僅か10センチくらいの間隔ですれ違いきることができた。が、意地悪車、今度は、路肩のほうに向って真っ直ぐ一直線。まだスピードはおちていない。それどころか、どんどんスピードが出ている状態。路肩は、ガードが10センチくらい高くなっている。これで止まってくれば幸いと思ったが、そんな生易しいスピードではない。このまま乗り上げれば、壁に突き当たる。それでは車の前がぺちゃんこ。いっそ車を走行車線にもどしてやろうとハンドルを切る。車は、低いガードにぶつかり、ちょっとスピードは落ちたが、なんと、また、走行車線、追い越し車線をスーッと滑っている。みると、もう、そこは反対車線だ。

三度目のニアミス

これは、いかん。なんと、すぐ目の前に反対車線の車がのたりのたりと走っている。こちらは滑りっぱなしで制動が利かない。もうぶつかるのは確実。早く行ってくれ。ブレーキを踏もうが、ハンドルを切ろうが、車は好き勝手に滑っている。「このやろう。何とか言うことを聞いてくれ。頼む」の心境。その思いが通じたのか、それとも、偶然なのか、これまた自分では信じられない幸運。僅か、数センチのところで、これもぶつからずにやり過ごすことができた。そして、車は反対車線の側溝ガードを乗り越えてゆくことは間違いない。全くスピードが落ちていないのだ。みれば、そこには、金網がはってある。ゴルフ場のフェンスだ。これを突き破っては、そのさきどこまで滑り落ちるか分らない。

かすり傷で無事、止まった。こんな幸運もあるもんだ。

その金網に突っ込めば、車の傷みも軽くてすみそう。ただし、金網を支えている支柱にぶつかれば、これはヘッドランプが割れるくらいのことは覚悟しなければならんな。と思い、あとは運を天にまかす。と、なんと。こんな幸運もあるもんだ。車は斜めに金網に引っかかって無事止まった。助かった。止まってくれたのだ。暫くは放心状態。みれば、回りの車がみんな止まっている。私の車がどう動くか見ているのだろう。暫く、じっとしてうごかない。私の車の暴走振りに驚いているのであろう。反対車線の車も動こうとしない。気を取り戻し、ここは、とにかく、反対向きになった車を路肩から出して、走らなければならない。やおらバックで路肩から抜け出し、反対車線から、最初の衝突を免れた車が入った路地まで車を入れて一休み。と、なんと、そこに私の車のスリップの元凶となってビクアップトラックが止まっている。そのドライバー、私が必死でハンドルを切って右に左に車の間をすり抜けて走っていった、というより滑っていったのを一部始終みていたとのこと。その車の前に私の車を止めて、傷の具合をチェックしていたら、心配してくれたのか、一緒にあちこち見て回ってくれた。そして、車に傷がないのをみて、「えっ、何にも傷がないのか。信じられない。」といって、今度は2人で「良かった。良かった」と大笑いをして別れた。

アパートに帰り、暫くは心臓がドキドキの状態が続いた。この一件、相当奇怪なスリップ状況であったが、こうして記録に残せるのはまるで笑い話のよう。だが、決してそうではない。最後まであきらめると、私はまじめにこの記録を書いているのだ。

今回の騒動の原因、

前の車が坂道で止まったのがいけないのだ。

